

平成30年度 徳島大学大学院 総合科学教育部 I期 入学試験問題

博士前期課程

臨床心理学専攻

臨床心理学分野

受験科目名：臨床心理学

(一般選抜)

【注意事項】

- 1 係員の指示があるまで問題冊子を開いてはならない。
- 2 試験問題は、表紙（この紙）1枚、問題・解答用紙7枚の、合計8枚である。
- 3 解答開始後、各問題・解答用紙の「受験番号」欄に受験番号をはっきりと記入すること。
- 4 問題は合計5問である。5問ともすべて解答すること。
- 5 解答は指定された解答欄に記入すること。
- 6 配布した用紙はすべて回収する。

受験番号	
------	--

徳島大学大学院総合科学教育部博士前期課程臨床心理学専攻
臨床心理学 その1

第1問 次の論文アブストラクトを読み、下の問1～4に答えよ。

PURPOSE:

Systematic family-centered cancer care is needed. We conducted a randomized controlled trial of family therapy, delivered to families identified by screening to be at risk from dysfunctional relationships when one of their relatives has advanced cancer.

PATIENTS AND METHODS:

Eligible patients with advanced cancer and their family members screened above the cut-off on the Family Relationships Index. After screening 1,488 patients or relatives at Memorial Sloan Kettering Cancer Center or three related community hospice programs, 620 patients (42%) were recruited, which represented 170 families. Families were stratified by three levels of family dysfunction (low communicating, low involvement, and high conflict) and randomly assigned to one of three arms: standard care or 6 or 10 sessions of a manualized family intervention. Primary outcomes were the Complicated Grief Inventory-Abbreviated (CGI) and Beck Depression Inventory-II (BDI-II). Generalized estimating equations allowed for clustered data in an intention-to-treat analysis.

RESULTS:

On the CGI, a significant treatment effect (Wald $\chi^2 = 6.88$; $df = 2$; $P = .032$) and treatment by family-type interaction was found (Wald $\chi^2 = 20.64$; $df = 4$; $P < .001$), and better outcomes resulted from 10 sessions compared with standard care for low-communicating and high-conflict groups compared with low-involvement families. Low-communicating families improved by 6 months of bereavement. In the standard care arm, 15.5% of the bereaved developed a prolonged grief disorder at 13 months of bereavement compared with 3.3% of those who received 10 sessions of intervention (Wald $\chi^2 = 8.31$; $df = 2$; $P = .048$). No significant treatment effects were found on the BDI-II.

CONCLUSION:

Family-focused therapy delivered to high-risk families during palliative care and continued into bereavement reduced the severity of complicated grief and the development of prolonged grief disorder.

出典 : Kissane et al. (2016). Journal of Clinical Oncology, 34, 1921-1927.

受験番号	
------	--

徳島大学大学院総合科学教育部博士前期課程臨床心理学専攻
臨床心理学 その2

問1 PURPOSEの全文(下線部)を和訳せよ。

--

問2 研究参加者はどのように抽出され、その後どのようにして、どのような群に割り付けられたか、説明せよ。

--

問3 この研究によりどのような結果が得られたか、詳しく説明せよ。ただし、統計記号は省略してよい。

--

問4 この研究に、日本語で適切なタイトルを付けよ。

--

小計	
----	--

受験番号

徳島大学大学院総合科学教育部博士前期課程臨床心理学専攻
臨床心理学 その3

第2問 心理学に関連する、次の語 1～20 とそれぞれ関連が最も深い語を、下の語群 a～z のうちから一つずつ選び、該当する記号を解答欄に記入せよ。

- | | | |
|------------------|--------------------|----------------------------------|
| 1. 内的整合性 | 2. Wundt, W. | 3. Penfield, W. G. & Boldrey, E. |
| 4. Hull, C. L. | 5. Köhler, W. | 6. レスポンデント条件づけ |
| 8. Lorenz, K. | 9. Helmholtz, H. | 10. Sperry, R. W. |
| 12. Bandura, A. | 13. Terman, L. M. | 14. Erikson, E. H. |
| 16. Spearman, C. | 17. Fechner, G. T. | 18. Skinner, B. F. |
| 20. Damasio, A. | | |

語群

- | | | | |
|------------------------|-----------------|--------------|--------------------|
| a. クロンバックの α 係数 | b. 主題統覚検査 (TAT) | c. 聴覚の共鳴説 | d. 「生理学的心理学綱要」 |
| e. 実験神経症 | f. 社会的学習理論 | g. 欲求低減説 | h. 場面間転移性の原理 |
| i. 洞察学習 | j. 自己同一性対自己拡散 | k. 刷り込み現象 | l. ストレンジ・シチュエーション法 |
| m. スタンフォード・ビネー知能尺度 | | n. 接触理論 | o. 素朴心理学 |
| p. PM 理論 | q. ソマティック・マーカー説 | | r. ホムンクルス |
| s. ロボトミー | t. フリーオペラント | u. 表出性失語症 | v. 分離脳研究 |
| w. 順位相関係数 | x. 積率相関係数 | y. 精神物理学的測定法 | z. K-ABC |

解答欄

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
記号																				

小 計

受験番号	
------	--

徳島大学大学院総合科学教育部博士前期課程臨床心理学専攻
臨床心理学 その4

第3問 次の文章を読み、下の問1～3に答えよ。

Aさんは講義でのレポートを作成するため、Aさんの通う大学の同じ専攻に所属する100名を対象に、自我同一性と他者への信頼感を測定した。その結果、2つの変数間に弱い正の相関が認められた($r=0.39$)。そこでレポートに、「自我同一性が確立されることにより、他者への信頼感が形成される」と記載したところ、担当教員から再提出の指示をうけた。

問1 因果関係の成立に必要な条件を3つあげよ。

--

問2 Aさんのレポートの問題点を指摘し、対処方法を述べよ。また、記載内容については、より適切な表現に書き換えよ。

--

問3 Aさんのレポート結果もふまえ、一般的に相関係数を解釈する際の注意点を述べよ。

--

小計	
----	--

受験番号

徳島大学大学院総合科学教育部博士前期課程臨床心理学専攻
臨床心理学 その5

第4問 心理学に関連する、次の語 1～20 とそれぞれ関連が最も深い語を、下の語群 a～z のうちから一つずつ選び、該当する記号を解答欄に記入せよ。

1. reactive attachment disorder (反応性アタッチメント障害)
2. Psychoeducational Profile-3rd edition (PEP-3)
3. person-centered approach (PCA)
4. Eye Movement Desensitization and Reprocessing (EMDR)
5. 新版K式発達検査
6. Dialectical Behavior Therapy (DBT)
7. synchronicity (共時性)
8. Revised Hasegawa Dementia Scale (HDS-R)
9. Vineland Adaptive Behavior Scales Second Edition (Vineland-II 適応行動尺度)
10. ペアレント・トレーニング
11. 風景構成法
12. Das-Naglieri Cognitive Assessment System (DN-CAS)
13. Mentalization-based Treatment (MBT)
14. Hamilton Rating Scale for Depression (HAM-D)
15. 「いま、ここに生きる人間」
16. Narrative approach
17. Maudsley Personality Inventory (MPI)
18. 論理療法
19. Alexithymia
20. House-Tree-Person Test (HTP テスト)

語群

- a. 構造化面接
- b. Planning, Attention, Simultaneous, and Successive processes theory (PASS 理論)
- c. Peals, F.
- d. 移動運動・手の運動／基本的習慣・対人関係／発語・言語理解
- e. Autism Spectrum Disorder (ASD)
- f. 児童虐待
- g. Ceci's bioecological theory (セシの生物生態学的理論)
- h. Yamanaka, Y. (山中康裕)
- i. Jung, C. G.
- j. Rogers, C. R.
- k. 認知症
- l. 姿勢・運動／認知・適応／言語・社会
- m. Ellis, A.
- n. 半構造化面接
- o. Attention Deficit / Hyperactivity Disorder (ADHD)
- p. Hellmuth, H.
- q. Nakai, H. (中井久夫)
- r. Shapiro, F.
- s. Fonagy, P.
- t. Sifneos, P. E.
- u. 非構造化面接
- v. Eysenck, H. J.
- w. White, M.
- x. Specific Learning Disorder (SLD)
- y. Linehan, M. M.
- z. Buck, J. N.

解答欄

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
記号																				

小 計

徳島大学大学院総合科学教育部博士前期課程臨床心理学専攻
臨床心理学 その6

第5問 次の文章を読み、下の問1・2に答えよ。

ある大学・心理学科の専門課程の必修科目「心理学実験実習」では、1年間を通じて、さまざまな心理テストや心理実験を体験させ、データの収集と解析方法の習得と、レポートの書き方など心理学研究に必須の基礎技能を指導する。この時テストや実験の被験者となるのは、通常、その科目履修者達自身である。

授業の初回ガイダンスでは、履修者に対して、「この授業の中では、知能検査やパーソナリティ検査など、心理学がこれまでに開発してきた歴史的に重要で代表的なさまざまなテストを実施します。これらのテストが、どのような理論に基づき、どのような作られ方、採点のされ方、結果の解釈のされ方をするのかを理解してもらうために実際に履修者の皆さんが互いにテスターと被験者の両方の役をこなしてもらい、採点まで行つて、その結果の解釈をレポートしてもらいます」と説明している。

実習として「京大NX式知能検査」を実施した。知能検査と聞いて、学生からは「えーっ、嫌だな」という声が上がったが、教員は「そもそも大学に合格した段階で、みなさんは十分に人並みすぐれた知能を持っているということが証明されているわけですから、全く心配はいらないんですよ」となだめた。そして全員が教員のインストラクションのもとですべての問題を解き終わり、いよいよ採点に入った。「では採点を行います。厳密に行うために、隣の方と交換をしてください。そして責任を持って隣の方のテストの採点をしてください」。

各自の知能指数が計算し終わる頃になると、教室のあちこちで、得点の比べ合いが始まった。(中略)ほとんどの学生にとって初めて明らかにされる自分のIQを目の当たりにして、いつになく興奮気味の様子であった。この授業の中ではその後、テストの信頼性と妥当性の話題に触れ、IQ得点そのものが人間の知能の全てを測定している訳ではないこと、得点の前後5ポイント程度の誤差が含まれていることを説明、またIQ得点は遺伝によって全て決まっている訳ではなく、経験や教育によって大きく変わる可能性があることについても説明し、このテストで仮に自分が期待していたほど高い得点が取れなくても気にすることは全くないと説明された。

その後、その授業を履修していたある学生について「あいつはIQが100もない」という噂が広がり、その学生はそれを知って教師とクラスの友達に対して強い不信感を抱き、同時にひどく自信を失って学生相談室でカウンセリングを受けるようになった(略)。

受験番号	
------	--

徳島大学大学院総合科学教育部博士前期課程臨床心理学専攻
臨床心理学 その7

問1 下線部の用語について、説明せよ。

(1) 知能検査

--

(2) テストの信頼性と妥当性

--

(3) 学生相談室

--

問2 この教員の行為について、倫理上の観点から、問題があると思うか、ないと思うかを述べ、その理由を述べよ。

この教師の行為は、

--

その理由

--

小計	
----	--

合計	
----	--